

東京オリンピックと

横浜③

一九六四（昭和三九）年一〇月に開催された東京オリンピック二〇種目のうち、横浜ではサッカーとバレーボール、ならびにバスケットボールの予選が行われた。横浜市では一九六三年八月二三日にオリンピック事務局、九月二八日にオリンピック東京大会横浜市実行委員会を設置し、開催に向けた諸準備にあたることとなった。飛鳥田一

雄市長は、「オリンピックをひとつの契機として、簡素ながら街を美しくきれいにし、来浜する国際人には暖い気持をもって接し、しいては国際港都横浜の好印象を広く全世界へ紹介する千載一遇の好機である」と、その意義を市民に説いていた（『横浜市オリンピック事務局会報 よこはま』一）。

当時の横浜市は人口約一六〇万人。郊外部に一〇〇〇戸を超える巨大団地が出現するなど、東京のベッドタウン化が進む一方、臨海部では根岸湾埋立工事が佳境に入り、新たな工場地帯が誕生した。また一九六四年五月には待望の根岸線（桜木町―磯子）、一〇月には東海道新幹線が開通するなど、市を取り巻く交通網も大きく変貌しつつあった。飛鳥田市長は、急速な都市化と工業化によって生じた様々な都市問題を解決すべく、「子供を大切に市政」「誰れでも住みたくなる都市づ

くり」を二枚看板に、市民参加という新しい手法を通じて、生活環境の整備と社会福祉の充実を急いでいた。

競技場の整備

サッカー五会場のうちのひとつとなった三ツ沢公園球技場では、観客一万四〇〇〇人の収容を可能にすべく、メイスタンド・サブスタンドの増設と、芝生の張替えなどが行われた。総工費二億六二八〇万円で、一九六四年七月末に完成した。

バスケットボールの予選会場、ならびにバレーボールの第二会場（第一会場は駒沢）となる横浜文化体育館では、一六〇〇人収容の仮設スタンドの増設と、フロアーの塗装などが行われた。また同館北隣に選手・役員用のレストハウス（二階建、九八九平米、後に平沼記念レストハウス）、同館西側の横浜工業高校寿分校内に、練習用の補助体育館（二階建、一〇三五平米）が新設された。

都市環境の整備

競技場の整備と併せて、二会場周辺を中心に、都市環境の整備が行われた。市内の主要道路には標識、照明灯が設置されたほか、公衆便所の増設や、ゴミ箱・吸殻入などが街角に配置され、衛生的な街づくりが進められた。

最も頭の痛い問題は、ごみ処理であった。飛鳥田市長が一九六三年に始めた「市長への手紙」の内容別分類でも、

道路舗装・下水道整備の次に多いのが清掃に関わる問題であった。

一九六五年当時、市内約四七万世帯のうち市が収集したのは四〇万世帯で、このうち計画収集（週に一〜三回、日時や場所を決めて収集）は、ようやく七割に達したばかりであった。また各家庭に備えられていたコンクリート製のゴミ箱がいたる所に残っており、街の美観を損なうとして、オリンピック開催を前に撤去を求める声が市民からも寄せられていた（『広報よこはま』一七三号）。

横浜市では清掃車を増強し、近代的な塵芥処分場を星川、鶴見に建設するなど、ゴミ処理の体制を強化した。また「衛生的な容器できれいな町」を標語に、コンクリート製のゴミ箱を逐次撤去する一



「みんなで横浜を美しく」と記されたゴミ入れ
1964年7月21日 広報課写真資料
後方に東京五輪の公式ポスターが見える。



二葉町子ども会の美化運動 1964年7月4日 広報課写真資料

方、ポリエチレン製の蓋つきゴミ容器の普及を図った。オリンピック開催の前年には横浜市美化運動実施本部が設置され（一九六三年一月一四日）、美化運動が推進された。山下公園周辺の観光地、伊勢佐木町などの繁華街はもとより、市内各地で町内会、婦人会、子ども会などが中心となって、道路・側溝・停留所付近の清掃が行われた。

このほか水不足も深刻な問題であった。東京ではこの年（一九六四年）夏、多摩川の給水エリアで断水が一九時間に及ぶところもあった。オリンピック開催を危ぶむ声もあったが、利根川と荒川を結ぶ放水路の突貫工事と、八月二〇日の豪雨でようやく開催にこぎつけることができた。

横浜も四五年ぶりの異常渇水に見舞われ、七月中旬から二割の流量制限を加えたため、高台の一部では断水する家庭もあった。水道局は、市民や業者に節水を呼び掛けたが、八月に入つて事態はさらに深刻化、一〇日には自主節水三割運動を進めてバルブ制限を行い、市内を三ブロックにわけて時間断水を行うことも検討した。しかし、横浜市ではこの年の六月、道志川・相模湖に加えて、新たに馬入川（相模川下流）から取水する工事を一部完成させていたことから、何とか断水の危機は回避された（『横浜水道百年の歩み』）。

歓迎・接遇対策

オリンピックに際し、来浜する外国人は約一万人程度と見込まれており、横浜市では、商工会議所、観光協会、商店街などと協力して、様々な歓迎・接遇対策を行った（以下の記述は、『横浜市オリンピック事務局会報 よこはま』3より）。

まず海の玄関に当たる横浜港では、総工費約六億円を投じて大棧橋上屋を改

築し、税関・入管事務所・銀行・郵便局・交通公社などが入る二階建のターミナルビルを一〇月一日に完成させた。この大棧橋ターミナルと、横浜駅西口、桜木町の三か所に、観光案内所や和英併用の案内板が設置された。また大棧橋ターミナル、新港埠頭、三ツ沢競技場、文化体育館、関内駅の五か所に観光案内所を開設し、英・仏・露・独・スペイン語に堪能な通訳が配置された。

市内の観光地では、三溪園の松風閣跡に展望台が設けられたほか、駐車場に洋式トイレ（有料）が新設された。オリンピック期間中には、市内一か所に日の丸と五輪のマークを付した一四基の歓迎塔が立てられ、各商店街には歓迎のアーチや提灯が飾られた。

オリンピック市民運動

政府は、オリンピックの意義を広く国民に理解してもらい、積極的に協力する気運を高めるために、国民運動推進連絡会を設置し（一九六三年六月二二日）、様々なオリンピック市民運動を展開した。神奈川県でも、国民運動神奈川県推進連絡会が中心となって、オリンピックと国際理解を深める展示会、公衆道徳・商業道徳・交通道徳を高める運動、町の美化やスポーツ振興を呼びかける運動などを行った。

横浜市ではこれらと連携しながら、前述の実行委員会が中心となって、巡回映画会の開催（二百回）、美化運動の

しおりの配布（十万枚）、児童生徒の公衆道徳ボスターの募集（一五〇〇点）、商店員・接客従業員らを対象とした英語講習会の実施、フラーボックスの配置、花壇の造成などを行った。

オリンピック関連の行事も多数行われた。開催を一年後にひかえた一九六三年一〇月にはリハーサル（プレオリンピック）として、東京国際スポーツ大会が開かれ、文化体育館では一二日から一六日

までバレーボールが行われた。男子四チーム（ソ連、全日本選抜、実業団選抜、学生選抜）、女子五チーム（ソ連、チェコ、一般選抜、高校選抜、日紡貝塚）が参加し、一六試合が行われ、連日満員となった。注目のソ連―日紡戦が行われた最終日は、当日券を求める数十人と係員との間でトラブルが発生



第12回国際仮装行列（みなとまつり）
1964年5月9日 広報課写真真資料



三ツ沢競技場のオリンピックフェスティバル
1964年6月21日 広報課写真真資料

するなど、金メダル獲得が期待される女子バレーボールの人気は高まっていた。

翌年五月九日の国際仮装行列では、世界は一つ東京オリンピック（高島屋）、オリンピック音頭（横浜みんなよう会）、オリンピック白の幻想（松屋）など、五輪関連のフロート・行列が並んだ（『神奈川県新聞』五月一〇日）。

また六月二〇日から二五日まではオリンピック記念週間とされ、市内各地で催し物が行われた。六月二日には三ツ沢競技場で、約四万人を集めてオリンピックの開会式・閉会式を模したオリンピックフェスティバルが開かれた。二三日には文化体育館で「みんなで迎えるオリンピックデー」が開かれ、体操実技、ハンドボールの模範試合などが行われた。

このほか、オリンピックを記念したスポーツ旗が市内小中学校に贈られるなど、オリンピックムードは次第に高

まっていた。
九月六日には聖火が沖繩入りし、そこから四つのルートで全国を一巡した。一〇月六日に箱根に到着した第二コーズの聖火は、翌日小田原から江ノ島ヨットハーバー、三浦半島を経て横浜へと入り、横浜文化体育館前を駆け抜けた。神奈川県庁で一泊した後、翌朝三ツ沢競技場を通り、鶴見区を経て東京へと向かった。沿道では一三〇万人の人びとが、小旗を振って聖火ランナーを迎えた。

オリンピックの開催

こうして第一八回オリンピック東京大会は、一九六四年一〇月一〇日から二四日まで開催された。九四か国、約七五〇〇人に及ぶ選手・役員が参加し、



横浜文化体育館でのバスケットボール予選
1964年9月 広報課写真資料

チームの試合が無かったせいも、人気のバレーに比べるとチケットが売れ残り、「サッカー会場がガラガラだという事で、近くの学校に呼びかけ観戦してもらった」(「財団法人横浜市体育協会 八十周年記念誌」と、観客動員には一苦労だったようである。
横浜文化体育館では、一〇月一二日から一〇日間にわたり男女のバレーボールが行われ、三万三〇〇〇人を集めた。男子一〇チーム、女子六チームが参加し、リーグ戦二二試合が行われた。日本男子は韓国、アメリカ、オランダと、女子はルーマニア、韓国と対戦し、

衛星放送によって世界各国への中継が初めて行われた。

これに先立ち、横浜では九月二五日から一〇月四日まで、バスケットの予選が行われた。一〇か国、一六〇人が参加し、総当たり戦で四五試合が昼夜二部制で行われ、メキシコ、オーストラリア、カナダ、韓国の四か国が本大会出場を決めた。文化体育館には四万人を超える観客が訪れ、選手・役員らは磯子のプリンスホテルに宿泊した。

三ツ沢公園球場では、一日から一八日までサッカー六試合が行われ、ドイツ、イラン、アルゼンチン、ガーナ、ユーゴスラビア、モロッコ、韓国、ブラジル、メキシコ、ハンガリー、ルーマニアの一か国チームが参加した。総入場者は約七万人を数えたが、日本

いずれも勝利を収めた。最終日のオランダ戦は三位決定戦で、日本男子が銅メダルを獲得した試合でもあった。

大会中、横浜市内には多い時で約四四〇〇人の外国人が宿泊し、大棧橋に停泊した豪華客船オリアナ号など五隻に約三八〇〇人が船中泊した。県・市・商工会議所等が中心となってオリンピック東京大会横浜歓迎委員会が組織され、市内では、茶会、菊花大会、観光写真展、ミルクフェア、生花展、民謡大会、日本舞踊大会なども行われた。しかし東京の主会場周辺に滞在する外国人が多かったため、宿泊客は当初見込みの約半分となり、また見学地も市内では港周辺と伊勢佐木町などに限られた(「神奈川県年鑑 一九六六」)。

期待されたオリンピック商戦も停滞気味であった。大棧橋ターミナルでカメラ・ラジオ・望遠鏡などが飛ぶように売れる一方、市内のデパートの売れ行きはいま一つで、外国人観光客の財布のひもは固かった。また自宅でテレビ観戦する市民が多かったため、市内の盛り場・行楽地では軒並み客足が減り、映画館で五割減、湯屋は二割減、デパートも一割五分減と、「五輪不景気」に見舞われた(「神奈川新聞」一〇月一七日・一八日)。
オリンピック閉幕から約二週間後の一月八日から一二日まで、第一三回パラリンピック東京大会が行われた。代々木のオリンピック選手村内の織田グラウンドなど五か所が会場となり、



大棧橋に停泊した豪華客船によるライトアップ
1964年10月13日 広報課写真資料

市民の見たオリンピック

二二か国三七五人が参加した。
かつて山内第一尋常高等小学校の校長をつとめていた大場町の白井隆資(当時七六歳)は、「いよいよ世紀の祭典がひしひしと身近かになつたぞ!」と、オリンピックの開催を楽しみにしていた。以下の記述は、彼の日記(白井文雄氏旧蔵)をもとにしてしている。

九月一八日入場券を購入しようとして日本交通公社(相生町)に出掛けたが、八時半の時点で数百人が並んでおり、人気のバレーボールは売り切れで、サッカーの入場券を手に入れるまで二時間半待たされた。九月二一日と一〇月二日には記念硬貨を市ヶ尾郵便局で買求め、テレビのアンテナの手入れ(一〇・二)、英会話の勉強(一〇・

八)、自宅の門前に掲揚する五輪旗の製作(一〇・九)など、準備に余念がない。

一〇月一〇日の開会式以後、隆資は農作業の傍ら、自宅のテレビで重量挙げ、体操、バレーボール、バスケットボール、マラソン、柔道などを連日観戦し、メダリストの名前、若干の感想などを連日書き留めている。

一〇月一五日には三ツ沢でサッカー(ドイツ対メキシコ)を観戦している。

独乙とメキシコの横浜三ツ沢新設競技場に於るサッカー(フットボール)見学、入場券は二等500円のもの、席は中央正面F113。

双眼鏡にて限なく見学。独は白の上着に青パンツ、メキシカは上着緑、白パンツ。成績、独二、メキシコ〇。競技は45分やつて5分休、更に45分。ドイツ選手の健脚はよ

くメキシコを凌いだ。独のシュートよくメキシコを制圧し、続けさまに独メキシコに、サッカー高潮、三ツ沢の秋

また息子の文雄(横浜国立大学附属中学教諭)は生徒たちを引率して、バスケットの予選や、東京のオリンピック会場に観戦にかけたほか、孫の孝雄は中学校で授業後にテレビ観戦するなど、白井一家はオリンピックの話題で持ち切りであった。

競技最終日(一〇・二三)には、「ヘーシンク(和)カミナガ(日)」と柔道無差別級決勝で敗れた悔しさを滲ませる一方、金メダルを決めた女子バレー

については、大松博文監督と河西昌枝以下六名を列記し、「東洋の魔女 世界一のバレー!」と喜びを露わにしている。世紀の祭典を間近で見る事のできた昂奮がひしひしと伝わってくる。

東京オリンピックは「テレビで見ると、子どもたちの洗礼を受けることになった。横浜市教育研究所が小中学生三二〇名を対象にまとめた『オリンピックテレビジョン視聴感想集』から、その一端を垣間見てみよう。

子供たちの見たオリンピック

東京オリンピックは「テレビで見ると、子どもたちの洗礼を受けることになった。横浜市教育研究所が小中学生三二〇名を対象にまとめた『オリンピックテレビジョン視聴感想集』から、その一端を垣間見てみよう。

帰宅後に家族と視聴するものが多いが、朝七時から夕方四時まで見るもの、店番や家事の合間に見るもの、また「母に、無理やりに、オリンピックをみせられた」ものもある。

特に目にとまった競技としては、体操、バレーボール、マラソンが多い。日本人金メダル第一号となった重量挙げの三宅義信、マラソンで連覇したアベベと三位になった円谷幸吉、体操個人総合で金メダルに輝いた遠藤幸雄などが挙げられているが、やはり多いのは女子バレーチームである。

開会式は多くの子どもたちにとって深い印象を与えたようで、「日本人が知らなかった国も、みんなにあえるオリンピック。もうオリンピックは終りだときくと、なんだかさびしくなりました」と、感動をかみしめている。

その一方で、「日本人は、選手に期待をかけすぎている。やる前から、金メダル確実とか、入賞確実とか、かっつてな予想ばかりして、選手が予想より悪いと、もんくをいったり、それでは一生けんめいやった選手がかわいそう

だ」「道路を造つたりいい競技場を作つたり。そんなにお金をかけるのだからなぜ、パラリンピックにきふしなのだろうか」と、冷静な子どもたちもいた。

主会場となった東京では、選手村と競技場を結ぶオリンピック道路が整備されたほか、都電が廃止されて地下鉄に代わり、小河川が蓋をされて下水となり、高速道路が中空を縦横に走るなど、都市空間が立体化した。震災復興、戦災復興につづく、第三の都市改造が行われたのである(上山和雄「東京オリンピックと渋谷、東京」『東京オリンピックの社会経済史』)。

横浜でも、東京オリンピックの翌年、一九六五年二月の市会全員協議会で、飛鳥田市長が「都市づくりの将来計画の構想」を発表した。これは、都心部再開発・金沢埋立・港北ニュータウン・ベイブリッジ・地下鉄・高速道路を含む、後の六大事業の原型となるプランであった。横浜市の都市づくりも、東京オリンピックを境にして、新たな段階を迎えつつあったのである。

【主要参考文献】

オリンピック東京大会神奈川県実行委員会編「第18回オリンピック東京大会」神奈川県(神奈川県、一九六五年)／横浜市オリンピック事務局会報「よこはま」113／「オリンピックテレビジョン視聴感想集」横浜市教育研究所、一九六五年三月／「横浜市事務報告書」／「市政概要」／「神奈川県」／「老川慶喜編『東京オリンピックの社会経済史』(日本経済評論社、二〇〇九年)など

(松本洋幸)